

少雨に対する農作物等管理技術対策について

平成27年5月29日
埼玉県農林部

4月下旬以降、晴れた日が多く、降水量の少ない状態が続いています。5月28日発表の1か月予報では、向こう1か月の降水量は平年並みまたは少ない確率ともに40%で、今後もまとまった降雨は期待できません。

少雨対策として以下の農作物技術対策資料を作成しましたので、参考にしてください。

水 稲

- 1 これから田植え準備に入るところでは、畦畔、水尻からの漏水を抑えるため、補修・点検を行う。
- 2 代かきは田からあふれるほどの無駄な入水をせず、ヒタヒタ程度とし丁寧に行う。
- 3 田植え後の除草剤処理では、深さ5cmの湛水とし、水尻をしっかりと止めて漏水を防ぐ。処理後1週間を目標にそのままの状態を維持し、途中、水が切れ田面がでるような時だけ静かに補給する。
- 4 有効分げつが決まるまで（4月下旬から5月上旬植えて田植え後7週間程度、5月中旬から下旬植えて田植え後6週間程度）は浅水で管理する。
- 5 有効分げつが決まったら速やかに中干しを開始する。
- 6 用水不足で代かきが実施できず、田植えが遅れる場合は、次の苗管理を実施する。
 - ① 肥切れの場合は、苗箱あたり窒素成分で0.5g程度の追肥を行う。
 - ② 伸びすぎの恐れのある場合、葉がよれない程度に灌水を控える。
- 7 イネ苗の高温障害が散見されるので、風通しを良くするなど適正な育苗管理に心がける。

野 菜

◎共通事項

- 1 露地野菜では、敷わら、マルチフィルム、べたがけ資材等を使用して、地表面からの水分の蒸散抑制に努める。
- 2 は種又は定植期にあたる野菜では、降雨を待つか、十分かん水を行って作付けする。
- 3 高温乾燥条件下で発生しやすいハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類等の早期発見に努め、的確な防除を行う。
- 4 開花前後、肥大期等乾燥による影響が大きな生育ステージにある作物では、可能な限りかん水を実施する。

◎露地なす

- 1 高温・乾燥の影響により「つやなし果」や「短形果」等の不良果が増加するので、敷わら等により乾燥を防止するとともに、適宜かん水を行って草勢維持に努める。
- 2 生長点付近の先端部分が細くなるなど草勢の低下がみられる場合は、追肥や不良果の摘果を行って、草勢の回復を図る。
- 3 ハダニ類、チャノホコリダニ、ミナミキイロアザミウマ等の発生に注意し、発見次第薬剤防除を行う。その際、整枝・誘引と摘葉を行って薬剤の付着効果を高める。

◎ねぎ

- 1 生育が遅延している育苗ほについては、かん水を行い生育促進を図る。
- 2 幼苗、チェーンポット育苗では定植初期の乾燥の影響が大きいため、かん水チューブ等によるかん水を行い活着促進を図る。ただし、多かん水には注意する。
- 3 アザミウマ類等の発生に注意し、発生初期から薬剤防除を行う。

◎さといも

- 1 畑かん施設があるほ場では、1回当たり20～30mm程度のかん水を行い生育促進に努める。
- 2 土壌が極度に乾燥している場合は、追肥や土寄せ作業を行わない。
- 3 高温乾燥によりアブラムシ類やハダニ類が発生しやすくなるので、発生初期から薬剤防除を行う。

◎えだまめ・スイートコーン

- 1 開花前後及び肥大期のものは、可能な限りかん水を実施する。
- 2 アブラムシ類等の発生に注意し、発生初期から薬剤防除を行う。

果 樹

- 1 スプリンクラー等のかん水施設があるほ場では、1回のかん水量は、概ね20mm程度で3～5日間隔でかん水を行う。土壌にひび割れができる前から始める。日中の高温時を避けて、夕方の時間帯に行うのがよい。
- 2 草生栽培園では、草を刈り取ることにより土壌表面からの水分の蒸散が多くなるので、なるべく刈り取りを遅らせるか、刈り取り位置を高くするなど土壌水分の蒸散を防止する。
- 3 清耕栽培園では樹冠下に敷きワラを行い、地温上昇と地表面からの蒸散を防ぐ。
- 4 ハダニ類やナシヒメシンクイ等は発生時期が早まり、発生量も多くなるので、病害虫防除所の発生予察等を参考に、適期に防除を行う。

◎なし

スプリンクラーの無い園では、夕方にスピードスプレーで棚面に10a当たり2000程度を散水すると気温を下げる効果がある。

◎ぶどう

5月下旬～6月上旬は、無核栽培のジベレリン処理時期に当たり、この時期に乾燥するとジベレリンの効果が低下するので、灌水を行う。

◎ブルーベリー

根が浅く、乾燥により縮果が発生しやすいので、積極的にかん水や株もとに敷きわらを行う。

花植木

- 1 露地切花や浅根性の植木類は、可能な限りかん水に努める。
- 2 敷わら等により地表面からの蒸散を抑制する。
- 3 寒冷紗等の遮光資材を活用し、植物体温度の上昇を抑制する。
- 4 施設では内外部の遮光資材により温度の上昇を抑制し、換気扇や循環扇等により通風を図る。

茶

- 1 マルチ、敷きわらなどにより土壌水分の保持に努める。また、雑草による水分の競合を避けるため除草を行う。ロータリー等土壌の耕うんによる除草は、細根を切りやすいので避ける。
- 2 夏肥の施肥や、施肥後の耕うんは降雨が予想されてから行う。
- 3 棚施設など設置された茶園では被覆遮光し、葉焼けなどの高温害を防ぐとともに過度の蒸散を抑制する。
- 4 定植当年の幼木は干ばつ害が懸念されるため、新植ほ場ではかん水、マルチ・敷きわらなどの対策を実施する。枯死個体が発生した場合は、翌春補植する。
- 5 チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、カイガラムシ類、カンザワハダニ、ハマキムシ類が多発することがあるので、適切に防除する。

①農薬は最終有効年月までに、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を十分確認の上、使用してください。

②農薬の最新情報については、農産物安全課のホームページでご確認ください。